

Bookstart Newsletter



2022
冬
No.75

ブックスタート・ニュースレター



© Book Dash

南アフリカ共和国

特集

ウェルビーイングを目指すブックスタート

～ 世界的なネットワークの広がり ～

ロンドンにあるブックスタートの推進団体、ブックトラスト(BookTrust)の事務所を私たちが初めて訪ねたのは、2000年7月のこと。活動の発案者であるウェンディ・クーリングさんは、のちにその時のことを振り返り次のように語りました。「日本からの視察団が訪れた時『まあ、日本が興味を持っているんだわ』と驚き、これは何か大きなことにつながっている、と気づいたのです。もはやイギリスの国ではなくて、世界の子どもたちのためなのだ」と

それから18年の年月が経った2018年、グローバルネットワーク(Global Network for Early Years Bookgifting: 幼い子どもたちに本を贈る活動の世界的なネットワーク)が設立「※1」されました。今回の特集では、その中でも特徴的な取り組みを展開する南アフリカ共和国の活動を取り上げ、さらに現在「ウェルビーイング(wellbeing)」というキーワードが、ブックスタートの中でどのような期待と関心を集めているのかをご紹介します。

※1 ブックトラストの呼びかけで、イユールード(EURead:ヨーロッパ各地の読書推進団体の共同事業体)の中に設立され、日本も立ち上げ段階から参画した。

世界に広がる活動

現在グローバルネットワークには、ヨーロッパ、アフリカ、東アジア、オセアニア、北アメリカで活動する25の組織がメンバーとして参加しています。主にオンラインの場でそれぞれの活動の経験を共有したり、これから立ち上げようとする団体への情報支援を行っています。



世界各地で多様な活動が行われている

国や地域によって、活動の名称、実施規模、実施方法、対象年齢などはさまざまです。また活動の主たる目的も、それぞれが置かれた社会状況により少しずつ異なっています。例えば伝統的な読書推進運動として、識字運動として、多民族・多文化・多言語社会における子どもへの公平な機会を保障する取り組みとして、そして日本のように、親子の豊かな

関わりによる子どもの幸せを願う活動として行われる場合もあります。

多様な活動が集うネットワークではありますが、その多くは充実した母子保健サービスに象徴される社会福祉制度が整い、児童書の出版活動も盛んな先進国とされる国で行われています。

絵本づくりのプロが無償で力を結集

そんな中、ひととき特徴的な活動を展開しているのが、南アフリカのブックダッシュ(Book Dash)です。南アフリカは国内の貧富の差や機会の不均衡が大きな社会問題であり、コロナ禍の影響で失業率は5割に上り、多くの国民が日々の暮らしで精いっぱい生活強いられています。国際的な学力調査「※2」によると9歳児の78%は、文章から基本的な情報や意味を読み取ることができず、子どもの本はほとんど出版されていないため、一般的な子どもが学校以外で本を手に入る機会ほぼなかったそうです。

しかし子どもの本をめぐるこうした状況は、大きく変わりつつあります。2014年、「すべての子どもに5歳になるまでに100冊の本を」



という目標を掲げて、出版関係者の有志が集まり「ブックダッシュ」という活動を立ち上げました。そして現在までに、国内で200万冊以上の絵本が子どもたちに手渡されたのです。それを可能にしたのは、どのようなアイデアだったのでしょうか。

※2 IEA (International Association for the Evaluation of Educational Achievement : 国際教育到達度評価学会) が行っている PIRLS (Progress in International Reading Literacy Study : 国際学力調査)

12時間で10冊の絵本を創り出す

ブックダッシュが他の活動と大きく異なるのは、まず子どもたちに手渡す絵本を制作するところから始めなければならぬ点でした。他国で出版された絵本を翻訳するのではなく、南アフリカの子どもたちの生活が描かれた質の高い絵本を手渡した

い。南アフリカの公用語である11言語で出版し、母語で絵本を楽しんで欲しい。こうした願いを叶える絵本を、短時間で、大量に、低コストで出版するというミッションが生まれました。

そこでアフリカ大陸各地で活動する絵本制作のプロに無償で協力を求め「12時間で10冊の絵本を創る」というイベント、事業名にもなっている「ブックダッシュ」を発案しました。朝9時に開始するイベントでは、作家／イラストレーター／デザイナー／編集者／進行役が一人ずつ入るチームを10組つくり出す「※3」。絵本のストーリーづくりから作画、レイアウトや全体のデザインを夜9時までに終わらせ、1チーム1冊、合計10冊のバラエティ豊かな絵本が1日で出来上がるのです。

イベントに参加したイラストレーターの一人は、こう語っています。「私の仕事はいつもなら、1日に1ページも仕上がらないことがあります。普段は何か月もかけて1冊の本

を創っているのです。でもこの素晴らしい目的のために作られた特別な機会で、とても良いものができました。刺激的で、なによりも楽しい経験をしました」

※3 編集者と進行役は2チームを兼任

「自分の本」を子どもたちの手に

こうして出来上がった絵本は、低コストでの出版と効率的な管理を可能とするために、どのタイトルも同じ判型で大部部数が印刷されます。そして学校、病院、スーパーやレストラン、NPOやNGOなど、子どもと接点をもつ200以上の機関連や場の協力を得て、全国の子どもたちに手渡されています。南アフリカでは「自分の本」を持っている子どもが少ないため、絵本を手にした子どもたちは、初めての「自分の本」をととても喜び、夜は枕の下に置いて寝る子どもが多いそうです。

絵本づくりのイベントは、まさに



© Book Dash

ダッシュするかのような勢いとパワフルさが求められるでしょう。ブックダッシュはその後も回数を重ね、6年間で166タイトルが、公用語に翻訳されたバージョンも含めると560種類以上の絵本が生み出されています。

事業運営にかかる費用は、財団や企業からの寄付によってまかなわれ、政府や公的資金からの財政支援はありません。厳しい社会状況の中で、民間から生まれたアイデアと支援のもとに展開しているブックダッシュの活動モデルは、同様の社会問題を抱える国や地域から大きな注目を集めています。

ポストコロナ時代のキーワード

イギリスが活動を開始した当時のブックスタートは、移民社会における課題を解決する事業として捉えられていました。そのためブックスタートは事業評価として子どもへの教育的効果を測る調査を行っていたことがあります。それが時を経て現在は、公益団体からの財政支援を確保するために、活動が子どもの「ウェルビーイング (wellbeing)」と結びついていることを示そうとしています。政府がこの言葉を、ポストコロ

ナ時代の豊かな社会を築くキーワードとして捉えているからです。

「ウェルビーイング」とは個人やグループが、身体的・精神的・社会的に「良好な状態にあること」を指す概念とされます。「幸福」とも訳されますが、「ハピネス (happiness)」よりもさらに広い範囲を含み、瞬間的な幸福ではなく、持続的な状態を指します。

ブックスタートでは、シェアブックス (share books) (※4)の時間が、親子の愛着を深め、子どもが他者と協働したり感情をコントロールする力を育む可能性に着目しています。さらに活動によって教育や保健衛生の領域での社会的格差が小さくなることも合わせて示唆し、ブックスタートが子どもの総合的なウェルビーイングの向上につながることを明らかにしたい考えです。

※4 赤ちゃんにとつての絵本は、読むもの (read books)ではなく、読み手と共に楽しむもの (share books) だというブックスタートの考えから生まれたコンセプト

ウェルビーイングという願い

日本のブックスタートは活動の開始当初から、「赤ちゃんの幸せ」というウェルビーイングをその目的としてきました。長年の実践の中で一貫

して、そこに活動の最大の価値を置いてきた日本のブックスタートに対して、いまグローバルネットワークの中で大きな関心が寄せられている。

世界各地の経験がお互いに共有されれば、身近に生まれる赤ちゃんへの思いは、自然とお隣の国の赤ちゃんにも、そしてまだ活動が行われていない地域に生まれる赤ちゃんにも向けられます。やがてそれぞれの地域で行われている活動は、ウェルビーイングという願いを共有しながら、まるい地球のようにつながっていくのではないのでしょうか。ブックスタートを通して、世界の赤ちゃんのウェルビーイングを目指すこと、それがウェンディさんが予感した「何か大きなこと」なのかもしれません。



© Book Dash

新刊

の
ご案内

20th Anniversary Book

ブックスタートの20年

自治体と市民が 赤ちゃんの幸せのためにつながり 実現してきたこと



「406」の言葉と
各地の写真が
チカラをくれる！



定価 1,100 円 (本体 1,000 円 + 税 10%)
ISBN 978-4-902077-13-1

2001 年に 12 自治体で開始され、二十歳を迎えた日本のブックスタート。これまで約 786 万人の赤ちゃんが対象となりました。各地で作り上げられてきた活動は、どのように深まり、広がってきたのでしょうか――。

自治体職員、ボランティアの方々、保護者の言葉を、「行政」「図書館」「母子保健」「子育て」「地域づくり」「赤ちゃんと保護者」「世界」などのキーワードに沿ってまとめました。記録に留まらず、今後の活動の参考となる声も満載！ 20 年間の実施自治体一覧も掲載しています。

編者 NPO ブックスタート

監修 大日向雅美 (恵泉女学園大学学長、あい・ぽーとステーション代表理事)

代田知子 (公共図書館館長、司書、日本子どもの本研究会会長)

2022 年 1 月発行 / A5 サイズ / 248 ページ (巻頭カラー 8 ページ)

ご注文はこちらから▶

NPO ブックスタートオンラインショップ
※全国の都道府県立図書館およびブックスタート実施自治体に各 1 部寄贈しています



ブックスタートでの読みきかせ

シェア ブックス
～ share books の楽しさを伝える “コツ” ～

「ブックスタート赤ちゃん絵本」30 タイトルについて、“share books” の楽しさを伝えるための様々な“コツ”を紹介。絵本の読みきかせに関する豊富な知識と経験を有するおふたりの専門家のお話を元にまとめました。

「ブックスタートでは、どのように赤ちゃんに絵本を読めばいいですか？」事業に携わる皆さんからの、そんな疑問にお応えする資料です。

当 NPO ウェブサイトから
ダウンロードできます！
(A4 / 12 ページ / 無料)
* 当 NPO 取引自治体向け



【内容】読み方イロイロ。楽しもう／絵と言葉に思いを寄せて／持ち方・めくり方に配慮して

新しい
資料
ができました

ことのは

NPO ブックスタートのスタッフが出合った言葉

「胸の中にお星さまがもどってきてキラキラして楽しいの！」

『こどもホスピスの奇跡 短い人生の「最期」をつくる』(石井光太 著・新潮社) より

病院での過酷な治療に、「心に穴が開いてお星さまが全部出ていっちゃった……」とつぶやいた 3 歳の女の子。両親は残された日々で楽しい思い出をつくってあげようと決意し、「こどものホスピスプロジェクト」へ協力を依頼します。旅行や訪問支援などによって、心にお星さまを取り戻した女の子は、その後完成した日本初の民間こどもホスピス登録第一号となり、家族と一緒にベッドで最期を迎えました。

今、目の前の子どものお星さまは光っているかな。そのお星さまは何色かな。目に見えない輝きに、心を寄せる大人でありたいです。